2010年度第5回物学研究会レポート

「地域と関わる」

小泉　誠 氏

（デザイナー、Koizumi Studio主宰）

2010年8月17日

物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

第5回　物学研究会レポート

2010年8月17日

8月の物学研究会は、デザイナーとして活躍しながら、地域の特色を活かしたプロジェクトにも積極的に関わっていらっしゃる小泉誠さんをお迎えしました。地域社会に根ざした素材や技術、人々を活かした「モノづくりのあり方」や、地域と関わる際に大切な心構えや姿勢など、デザイナーとして「地域に関わる」をテーマにご講演いただきました。以下、サマリーです。

「地域と関わる」

01；小泉　誠 氏

小泉　誠 氏

（デザイナー、Koizumi Studio主宰）

こんにちは。小泉誠です。僕は物のデザイナーで、インテリアや家具なども手がけています。ここ10年ほど、いろいろな地域と関わりながら物づくりをする中で少し見えてきたことを、今日、お伝えできればと思っています。

●産地形成は江戸時代から

僕が今、関わっているメーカーは漆塗りや琺瑯、繊維や家具などですが、それぞれ産地があります。こうした産地形成がされたのは1600年初頭、江戸時代に入ってからです。それ以前は必要な生活道具は基本的に各地域で地元の素材や染め方でつくっていました。1800年代の産業革命以降は物づくりも機械化され、量産体制が整っていきます。さらに昭和になって工業化が進み、戦後以降はデザインもモダン化し、美しい製品も登場してきます。

近年ではインダストリアル化の典型ともいえるメーカーも生まれています。たとえば、ボダムは北欧のメーカーですが、デザイナーは日本人、チェコで物をつくり、日本で売るというグローバル化の象徴のようなスタイルをとっています。実は、僕が今、関わっている産地でも、生産は海外だったり、逆に販売地が海外だったりという状況が見られます。こんな背景を踏まえ、ここからは僕が関わってきた産地についてスライドを見ながらご紹介したいと思います。

●地域との関わり

ここ10年間でさまざまな地域と関わってきましたが、デザイナーが産地に入る際、地域での受けとめられ方は主に2種類あります。ひとつは「デザイナー野郎がきやがった」。たぶん過去に同様の経

験があったものの成果がでず、デザイナーを恨んでいる。もうひとつは、地域の方の姿勢が「何でもつくります」「デザイナーのいうことなら何でもやります」という受けとめられ方です。これはこれで怖いなと僕は感じます。

逆に僕自身が地域と関わるときのキーワードをお伝えします。まずひとつが、「自分の役割・役目があること」。地域の人や素材、技術といった特色をできるだけ生かして何かを伝えるために、僕が生かし、生かされることがあるかという点です。だから、初めて現地に行くときはノーアイデアで行きます。その上で何か役割があると感じれば、やります。

もうひとつが、「単発でなく、持続すること」。物づくりとは単に物理的に物ができればいいのではなく、誰かと物をつくっていくこと・・・。恋愛感情にかなり近いと思っています。だから、お互いに気持ちが共有できないとか、ただ単に物をつくるのが上手だとか、という人たちとは仕事につながらないケースが多いし、やる意義を感じないのです。それでは、素材と地域という視点でまとめた各地の事例をご紹介していきます。

●鉄――岩手県盛岡市

盛岡の南部鉄器ですが、アルミやステンレスなどの登場以降、鉄瓶の需要は減り、昔ながらの工法をとる工房は今、ほとんど数字があがっていません。そこで、鉄という素材の特長である「重さ」を生かそうと考え生まれたのが、この片手で切れるテープカッターやペーパーウエイトです。南部鉄器の売場がキッチン用品からステーショナリーへと広がったわけです。つくってすぐ売れる作品というのはなかなか難しいですが、3年目にしてようやく売れきています。

●和紙――岐阜県美濃市

やはり1600年初頭に産地形成され、主に障子紙としてつくられてきました。まだガラスがなく板戸だけで、部屋は暗いか明るいかだけだった時代に、風を防ぎ光も通す障子は画期的でした。障子紙は風に対して強く、でも光を通すために薄く白くなければいけないという要求に、美濃の高度な手漉きの技術が応えたわけです。

ところが、1960年代以降、障子紙としての和紙の需要がほとんどなくなり、美濃は今いる60代、70代の職人さんを最後に消えてしまいそうな産地のひとつです。僕がそんな美濃と関わったのは約7年前。漉き方によって厚さを自由に調整できる和紙の特長を伝えるメディアとして、内側にムーブメントを入れた時計をつくってみました。時計の針が透けて見えるように表の一面だけ薄い和紙を貼り、他の面には厚めの和紙を張って透けないようにしています。

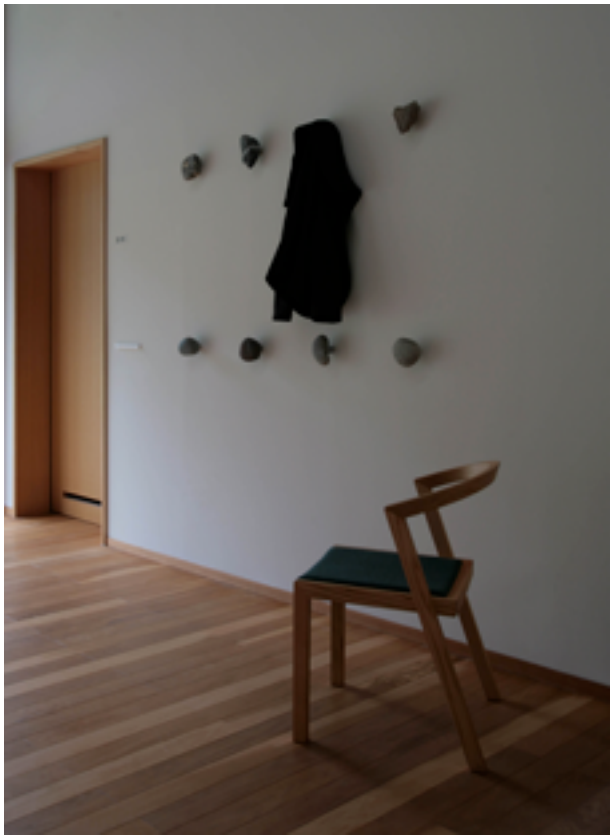
●瓦――愛媛県今治市

近年、姉歯事件の影響で、構造物の建築基準が厳しくなったこともあり、瓦屋根を上げる建築も激減。この産地も厳しい状況にあるなか、僕は去年、関わることになりました。今治の特長は燻し瓦という技術です。燻しは陶器を松の葉や枝を燃やした薫煙にさらすことで陶器の組織がすべて銀色に染まり、耐久性や耐水性が上がるという技法です。銀色になるため太陽の熱を遮り保温性や断熱性も上がる、とても優れた素材ですが、高価なのと重いということで最近は敬遠されがちです。

そこで、この燻しの技術を応用できないかと、まず、ガラスや鉄、溶岩など身の回りにあるあらゆるものを燻す実験を行いました。その後、瓦製品や花器をつくり、品品（しなじな）という景色盆栽の小林健二さんによる盆栽、さらに実験で使った物なども含めた展示会を開催し、燻しを使って何かできないかと、問いかけをしたのです。とはいえ、このプロジェクトはわずか1年で中断した珍しいケースとなりました。実は、厳しい現状といってもそれなりにまだ仕事があり当の瓦職人さんたちが新規開発に乗り気ではなかったのです。

●石――富山県大山地区

プロダクト開発というよりは町づくりプロジェクトに関わった例です。僕は活動拠点となるコミュニティセンター建設に関わりました。敷地が小学校の隣だったので、子どもたちにも関わってもらいました。まず、全校生徒18人全員に河原に集まってもらい、「重さ1ｋｇの石を当てるクイズ」を何回か行い、最後に「自分の好きな形で1ｋｇの石」を探してもらいました。最終的に石をセンターの壁に貼りフックにしました。子どもたちは自分の好きな石が壁のフックになって、まるで作品が飾られたように喜んでくれました。今後も同様のワークショップを定期的に行い、継続していこうと考えています。



02.作品画像

●琺瑯――三重県＋東京都

琺瑯は、鉄にガラスコーティングすることで錆びを防ぎ、薄く清潔感もある便利な素材として普及しましたが、アルミやステンレスなどより安価で扱いやすい素材の登場で、今は厳しい状況にあります。このメーカーでは素地は東京でつくり、琺瑯かけは三重で行っていますが、近年、現在の産地の中心は中国やタイに移っており、現在、2社ある三重でも数年内には1社になる見込みです。

僕は関わったのは約8年前。琺瑯生地の技術を駆使しディテールにこだわったオリジナリティの高いケトルをつくりました。一度メーカーが倒産したものの、復刻して商品化されました。琺瑯は1シリーズの型代に数千万円かかるため中小企業にとっては大きな負担であり、なかなか新しい形が生まれにくい事情がありますが、このケトルが少しずつ売れ始めたことで、他のメーカーも新型開発を始めたようです。ライバルにはなりますが、琺瑯全体が元気になるととらえ、今後に期待しています。

●漆

漆では3地域に関わっています。漆器の製造工程を簡単に説明します。まず原木から製材した木地を荒く削ってから煙で燻して乾燥させます。ヤニ分が芯まで染みて変形しにくくなります。続いて轆轤師が木地を削って成形してから漆を塗ります。湿気のある室に入れて保湿しながら乾かし、また漆

を塗ることを何度も繰り返します。たとえば輪島塗では20～30回繰り返します。こんな風に手間がかかる分、漆器はどうしても高価になるのです。

・輪島

一番の特長は軽さです。実は能登半島周辺は軽石のように細かい粒子の珪藻土でできていて、輪島の漆はこの珪藻土を混ぜているため、厚く塗っても仕上がりが軽く性能も高いのです。この軽さを生かしてつくったのがコーヒーカップ。漆器は直接持っても熱くないため、取っ手付きのアイテムは珍しいですが、今回は磁器や陶器のカップでは重くて握りにくいというお年寄り向けにあえてつくってみました。ちょっと値段は高いですが、使いやすい道具になった事例だと思います。こうした作品を広めるため、展示会も開催しました。会場は輪島キリモトのスタッフと協力し、すべて発泡スチロールでつくりましたが、会場を一緒につくるという行為もメーカーとの絆が深くなる一因だと感じています。

・香川

漆は何にでも塗れる塗料で、紙に塗れば強度や防水性が増す長所があります。余談ですが、僕は昔から興味を持っており、15年ほど前にアイスクリーム用スプーンに漆を塗った経験があり、今でもこのスプーンを使い続けています。さて、香川の方と出会ったのは約5年前。たまたまスタッフが打ち上げ花火の火薬を詰める玉皮を持ってきたことがきっかけで、この段ボールの再生紙でできた玉皮を素地にして漆器をつくりました。本来は木製の素地を使いますが、玉皮に替えることで通常15,000円位するものが、3,000~4,000円ほどでできます。ただ、木の素地と違い、もし穴が開いて水がしみこむと段ボールが膨らんで使えなくなるため、寿命が少し短くなりますが、あくまでも漆がもっと身近になればという考えで産地と意気投合し、行っているものです。

・飛騨

黒川雅之さんもメンバーのデザインコミッティによる「椀式」というプロジェクトで参加しました。デザイナー8人が飛騨に入り、椀と膳と箸をつくる企画でした。飛騨の漆は飛騨春慶（ひだしゅんけい）という技法が特長で、木地全面を漆で塗りつぶす輪島や香川とは異なり、木地が見える塗り方です。漆を数回塗り重ねるだけなのでかなり身近ですし、僕は潔い漆と感じました。

潔いとはいっても、枌板（へぎいた）と呼ばれる木地にはきちんと下塗りして透明感を出すのが昔ながらの技法です。染料は黄色ならマメの汁、赤ならベンガラが一般的ですが、他に何か使えないかと模索した結果、薫煙乾燥によって取れるコールタール状のヤニ、つまり松煙を下塗りに使ってみたのがこのお椀です。春慶の専門家には「これは春慶じゃない」といわれますが、下塗りをした上に漆を潔く塗るのが春慶だとすれば、僕は「これも春慶だろう」と判断し、つくってみました。

●磁器――多治見市

圧力鋳込みという手法をとる多治見のメーカーでは現在、世界数社の機内食用の食器をつくっています。航空食器は単純に見えますが、スタッキング性能や仕切りなど高い精度が要求され、特に磁器の場合はいろいろなバランスをうまく調整しないと歪みやすいので仕切りの位置がかなり制限されます。そのため、2分割かＴ字型が一般的なのですが、あえて真ん中に仕切りのある斬新な形に挑戦して完成したのがこの仕切り皿です。この皿は現在、無印良品で「こども食器」として販売されていますが、僕としては子どもから大人までずっと使ってほしいと思っています。実は僕も使っていますが、料理の盛り付け方しだいでいろいろ楽しめます。多治見の技術から生まれた便利な皿です。

●竹――大分県

去年出会ったメーカーで、本社は京都ですが、工場は大分にあります。竹はお茶や花、調理器具など、いろいろな分野で使われますが、このメーカーでもすでにさまざまな物をつくっていました。そのため最初は「僕に何ができるだろう」と思いました。ただ、後継者の息子さんはまだ20代ですが、「将来に向けて何とかしたい」という熱意がありました。そこで、まず僕がひとつつくり、既存製品から編集して、必要かどうか新たに考えていこうという方向性で進めることにしました。

僕自身は竹を扱うのは初めてでしたが、「皮が表も裏も強く、曲面である」という特性をなんとか生かそうと考え、完成したのがこの調理用ヘラです。工夫した点は、竹を切るときは通常、繊維を縦にとりますが、あえて横にとることでねじれを起こし、より掬いやすい形にしたことです。実は試作品を100個ほどつくりようやく出てきた形ですが、他にも先端の曲線を鍋の内側のアールに合わせることで、歪ませると平らになって鍋底をこそげやすいヘラもできました。

ところで、ヘラづくりを通して強く感じたのは、これらは脳みそでつくった形ではなく、手を使うことで出てきた形だということ。手を動かすことで生まれてくる力があるのではないかと感じています。

●紙＋竹――京都市

今年、京都の扇子店で働く友人に頼まれ、扇子屋の店舗デザインを行ないました。扇子は紙と竹を貼り合わせるのでなく、2枚の紙を貼り合わせた間に竹を差した3枚構成になっています。最近は布製も出回っていますが、ほとんど手作業で行われる紙製の扇子は海外での生産は難しく、日本独自のものだそうです。僕がつくったのは扇をイメージした空間です。和紙だけでなく、天然のパルプと化繊を混ぜた素材や竹を合わせた板材も使ってみました。

●錫――富山県高岡市

錫は柔らかい金属のため、アンチモニーなどとの合金が一般的ですが、この錫の柔らかさをあえて生かし、ぎゅっと握ると手に馴染む形になる酒器を高岡市の能作さんというメーカーとつくりました。錫という素材の魅力を伝えるメディアとしての意図もあり、展示会も開催しました。

●木

木の種類のよって産地もそれぞれ異なり、複数のプロジェクトに関わってきました。

・針葉樹――岐阜県

岐阜県は針葉樹地帯です。桧などは水に強い特性があり、建築資材や桶などに使われます。僕がこのメーカーに伺ったのは約3年前。主に飲食店の備品などの下請け生産をやっていたのですが、もっとオリジナリティを出して自立したいという希望がありました。そこで、建築資材という針葉樹のルーツを伝える意味も込めて、建築用の接手をモチーフにしてみました。さらに、こちらは2年前につくったソルト＆ペッパーですが、ようやく今年、製品化されることになっています。

・杉――宮崎県

地元の家具メーカーとのプロジェクトでしたが、このメーカーはブランコやジャングルジムといった遊具もつくっており、木と鉄の工場を持っていました。そこで、鉄の強度と杉の柔らかさを融合させて、椅子やベンチをつくりました。さらに、少しコンセプトモデル的になりますが、子どもの頃から木に触れてほしいという思いもあり、子ども用の木馬などもつくってみました。

・桧――高知県

風雨が多い土地なので、ヤニ分が多く水に強い高知の桧を使い、「土佐板」というまな板をつくりました。実はこの工房では元々、「四万十桧」というまな板製品を持ち、かなり高い販売実績もありました。だから、当初は「僕の役目はあるのか」と感じたのですが、年配の社長から「今はいいが、将来がないので、先につながることをやってほしい」と依頼されました。そこで、「できるだけ薄く」と現場に課題を出したところ、後日、10mm、9mm、8mmという3種類のサンプルが上がってきました。すべて実験したところ、どれも反らなかったので、8mmのものを「世界一薄い木製のまな板」として製品化しました。薄くしたことでまな板全体が軽量化され、市場ニーズにも合った新製品になりました。

・桜＋人――北海道旭川市

旭川市東川町で開催されている「君の椅子プロジェクト」に関わりました。企画者は旭川大学大学院教授の磯田憲一さんと学生さんたちで、東川町で毎年80人ほど生まれる子どもたちに椅子を贈ります。椅子は座ることでその子の居場所になるからです。

ところで、地域の方と話しているとよく出てくる話に、「バカ者、若者、よそ者」というのがあります。だいたい地域の中には「バカ者」がいて、その人が面白い企画を立て、そこに「若者」が加わって一緒に盛り上がる。旭川の場合は磯田さんがバカ者で、旭川大学の学生が若者ですね。さらに、よそ者が入ることで地域がより生かされるのだそうです。そこで旭川のプロジェクトでも毎年、地元以外のデザイナーがよそ者として入ることになっています。

僕は2009年に参加。素材としては樹齢約80年と人間の寿命に近い「桜」を選びました。デザイン的には、椅子は子ども自身が生まれてすぐ使うわけではないので、母親が授乳時に座ってちょうどいい高さでつくりました。子どもの成長とともに机にしたり座ったり、大人になってからは踏み台にしたり、お年寄りになったときには靴を履く台にしたり。そんな風に、一生使える道具になればと願っています。

また、プレゼント時点ではまだ完成品でなく、ご家族も椅子製作に関われないかと考え、オイルセットを付録し、家族がそれを塗って仕上げられるようにしました。さらに、「椅子の素」として桜の苗木も贈りました。桜について意識してもらいたいと同時に、バースデーツリーという意味もあります。実は僕が生まれたときに祖母がオリーブの木を植えたのが参考になっています。木が育つにつれて自分の木だと思い、実がなれば自分の実だと思う。そんな思いを子どもたちにも持ってほしい。そして、その木が成木となったとき、また別の道具になるというストーリーができればと思っています。

・木を使った町起こし―富山県大山地区

ここまではプロダクト寄りの話でしたが、もう少し地域と密接に関わっている仕事を紹介します。さきほど「石」を使ったプロジェクトで出てきた富山県立山山麓の大山地区についてです。この地域の特色は森林が93％。山と海の距離も近く、森林のミネラル分を含んだ水が海にストレートに流れ込みます。富山湾が豊かな漁場なのは木のおかげなのです。でも近年、町は新建材の家、鉄やプラスティックの看板などメンテナンスがより楽な素材のものが増え、木の存在感が消えつつあります。そこで「木の恩恵に気づいてもらおう」というのがプロジェクトの目的です。

関わっているのは僕のほか、地元の貫場幸英さんと、建築家の広谷純弘さんの3人です。まずはハード面として、現在までに3つのコミュニティ施設を広谷さんが木造し、室内家具のデザインを僕が担当しました。施設のメンテナンスは僕のゼミ生らが行っていて、地元の人には「よかったら一緒にやりませんか」というスタンスにしています。「やらされている」と思ってほしくないからです。こうした活動を続けていくうちに、「あなたたち、悪い人じゃないな」と感じてもらえるようになり、ここ数年でようやく僕らのことを信頼し始めてくれたという手ごたえがあります。

ソフト面ではこの施設を会場に、8年前から『Living Art in OHYAMA』という、地域の素材や情

報を伝えるイベントを行っています。メインは5年前に始めたデザインコンペで、子どもを対象に「木でできた冒険道具」というテーマでスケッチを募集し、出てきたアイデアを武蔵野美術大学と富山大学、東京理科大学の学生12人が協力して現物に仕上げるという内容です。初年度は応募者が6人でしたが、今年は1,700人に増えました。ほかにもワークショップや販売ブース、最近は地元の農家やシェフにも協力してもらい、食のイベントも始めています。

イベントは毎年3日間ですが、プログラムの継続性も心がけて物づくりを進めています。たとえば、ある年につくったモニュメントを翌年、ベンチとして活用したり、先に広谷さんによる建築ワークショップで壁をつくってから、次にイラストレーターの長友啓典さんのワークショップで、この壁に絵を描き、最終的にこの壁を町のバス停にしたこともあります。一過性でなく持続させていくことが地域の活動には大切だと考えています。

03.作品画像

●地域との関わり――これまでとこれから

こんな風に僕は地域で活動しています。それぞれの地域にしかない素材や技術、人々の思いなどを生かしていけば、他では真似ができない、ある意味でオンリーワンのものができる可能性があると思っています。また、物づくりをしていく過程は恋愛と同じだと本当に思っています。今日話した瓦屋さん以外は、今でも付き合っています。付き合っているというのは、その場に足を運んで一緒に酒を飲み、大ゲンカしたこともあるということ。愛情が深ければ深いほど本気でケンカしてしまうものです。最後に、ここ10年でこんな形で地域に点を打つことができたので、今後はその点を繋いでいけたらと思っています。僕一人のスケールでやっていますから、たぶんとてもゆっくりかもしれませんが。

もうひとつ、脳みそだけで考えるのでなく手を使わないとできないものもあると実感したので、年内には工房をつくろうと考えています。機械を仕入れて自分の手でつくる環境をつくり、この10年とはまた別の物づくりの形を見つけていきたいと思っています。「地域に関わる物づくりの仕方」という僕の話は以上です。長い時間、どうもありがとうございました。

Ｑ＆Ａ

Ｑ１：　初めて地域に入るときにノーアイデアで行くということですが、地元の方の理想などをどのように引き出すのかコツや工夫点を教えてください。

Ａ：　最初にこちらから提案すると、つくり手はたいてい「できる」と言います。でも、それは僕の枠だけで考えた案です。つくり手たちも本当は、独自の発想や技術、強い思いなどを持っているはず。そんな本音を引き出すために有効なのはアルコールですね。つくり手のなかには会議室などではあまり話さない人が多いですから。その際、「デザイナー野郎」と思っている人に対しては「信じてください」といった話をしますし、逆に「何でもやります」という人には「デザイナーなんて信じていいのか。僕は悪い奴かもしれない」ということもあります。あくまでも、お互いの信頼関係が大事です。

Ｑ２：　マーケティングの仕事をしています。特に面白いと思ったのは、素材に対して「メディア」という言葉を使っていた点です。たとえば、イベントで使った素材を最後にバス停にするなど、制作物をメディアとして使う発想は常々考えているのですか？

Ａ：　その時々で何をするかというのはいつも考えています。イベントで物をつくりたいが、予算がない。そこで、制作した物を別に転用することで予算不足を補うなど金銭面から思いついたり、いい結果を出したいと切羽詰まって出てきたアイデアもあります。その都度うまく賄うことが第一であり、使い回すことで持続できるなら、活用するよう心がけています。

Ｑ３：　現在は物をつくるよりも売っていくことが大変な時代です。デザイナーとして、つくった物を売るための工夫や戦略、取り組みなどがあれば教えてください。

Ａ：　ケースバイケースではありますが、すぐ売るとか多く売るとかよりも、基本的には関わったメーカーや工房のスケールをどう感じるかということが大事だと思っています。つくってすぐ売れるものとそうでないものは明らかにありますし、徐々に売れて行くこともあります。時間がかかっても持続させることが大切でしょう。売れることは大事ですが、できる範囲でメッセージを伝えられればと思っています。
以上

2010年度第5回物学研究会レポート

「地域と関わる」

小泉　誠 氏

（デザイナー、Koizumi Studio主宰）

写真・図版提供

01；物学研究会
02；Koizumi Studio
03；Koizumi Studio

編集=物学研究会事務局
文責=関 康子

● ［物学研究会レポート］に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
● ［物学研究会レポート］に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998～2010 BUTSUGAKU Research Institute.